10、小沢勇貫、前掲論文、新『浄土学』二九一頁。藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店、昭和四十五年）一二六頁。
11、恵谷隆戒『然阿良忠上人伝の新研究』（国書刊行会、昭和五十九年）所収、昭法全所収の底本。
12、「西方指南抄」『親鸞聖人真蹟集成』第五巻法蔵館。大橋俊雄『法然全集』第一巻所収の底本。
13、大橋俊雄『法然全集』三二頁。
14、浄全九所収の底本。
15、岸一英「逆修説法と三部経釈（『藤堂恭俊博士古稀記念、浄土宗典籍研究』（研究篇）同朋舎、一九八八年、一一〇頁）
16、昭法全及び大橋俊雄『法然全集』第一巻所収の底本。
17、岸一英、前掲論文、聖冏『大経直談要註記』巻第一所収（浄全十三ノ三―二五頁）
18、仏教古典叢書
19、浄全九所収「無量寿経釈」の底本
20、大橋俊雄『法然全集』及び昭法全の底本
21、仏教古典叢書
22、浄全九所収「観無量寿経釈」の底本
23、昭法全の底本
24、浄全九所収「阿弥陀経釈」の底本
25、大橋俊雄『法然全集』及び昭法全所収「阿弥陀経釈」の底本
26、正安三年（一三〇一）本願寺覚如房宗昭編、瓜連浄福寺所蔵。『法然上人伝全集』（井川定慶編）六〇一―六〇六頁所収
27、昭法全所収「法然上人御説法事」
28、伊藤祐晃『浄土宗史の研究』（昭和十二年所収）、書写年次なし、室町時代か
29、仏教古典叢書、大橋俊雄『法然全集』及び昭法全所収「逆修説法」の底本
30、浄全など昭法所収「逆修説法」の底本
31、昭法全「逆修説法」参照。宇高良哲氏は五つの系統に整理できるとされる。（①「師秀説草」、②「法然聖人御説法事」③「無縁集」④古本「逆修説法」⑤新本「逆修説法」）「『逆修説法』諸本比較」（前掲『浄土宗典籍研究』（研交篇）六四頁）
32、昭法全所収「選択本願念仏集」の底本
33、大橋俊雄『法然全集』（第二巻）所収『選択本願念仏集』の底本
34、浄全七所収本の底本
35、阿弥陀経釈には「夫所レ説往生極楽之旨、経論其数甚多不レ可二勝訂一、且其中取レ要抽レ詮、無レ過二三部経一。謂ゲ無量寿経、観経、阿弥陀経也」。（昭法全、一三〇頁）

するところにある。あまたある経典の中からこの三部を選定されたのは、この三部が最もよく法然の浄土念仏思想を示す経典であったからである。[35]

そしてその直接的典拠はまず恵心の『往生要集』にあったと思われる。『往生要集』は法然浄土教思想成立に重要な意義をもっていた。それは法然が『往生要集』の注釈書を四部残していることによっても明らかである。その『往生要集』の中には、先に見た如く、浄土経典に関する大きな示唆が与えられている、しかしそこには三部経以外の諸経典が示されている。その中からこの三部を選定されたについては、さらに善導の『観経疏』を本にされたものと思われる。即ち同疏散善義には無量寿経、観経、阿弥陀経の三経が明らかに重要な経典として示されている。この意味でも法然の三部経選定にはこの疏が重要な位置を示めているといえる。

また、三部経成立の前後についての議論も、近代的科学的観点からのものではなく、むしろ宗教的信仰的立場からのものである。この立場に立てば、むしろ『無量寿経』『観経』『阿弥陀経』の順ではないかというのである。これは法然が本願念仏の真実を明かさんとするものであるからである。それはまず浄土の建立、そこへの行道として念仏、そしてそれらを諸仏が證誠するという思想的流れの中で構築されたものといえよう。ここには弥陀―釈迦―諸仏の流れが見られ『選択集』の構成にもこうした三部の流れを見ることができる。即ち『選択集』第三章から第六章までは『無量寿経』、第七章及び第八章、第十章から第十三章までは『観経』、第十三章から第十六章までは『阿弥陀経』所説に関するものである。ここに法然独自の三部経成立史観があるともいえよう。

註

1、大谷旭雄「法然上人における三部経の選定と呼称」（藤原弘道先生古稀記念『史学仏教学論集』八五二―五六頁）。香川孝雄「法然上人の経典観」（浄土宗開宗八百年記念『法然上人研究』隆文館、昭和五十年、二一頁）

2、大橋俊雄『法然全集』第二巻、春秋社、一九八九年、一四頁。

3、香川孝雄、前掲書、二一三頁。

4、香川孝雄、前掲書、二一四頁。

『阿弥陀経疏』には「有二其四本一通明二浄土一即以二浄土一為レ宗、一観経二無量寿経三小阿弥陀四鼓音経」とある。（浄全五ノ五四一頁）

5、牧田諦亮「震旦諸師の浄土三部経釈」解題。浄全五、解題十一頁。『浄土宗辞典』一ノ二三頁参照。

6、藤堂恭俊「震旦諸師の浄土教に関する著作」浄全六、解題三頁。

7、同右。正徳版『阿弥陀経釈』には「但此要決ノ文有二先達諍一。云々他宗ノ章疏目録中ニ多クハ慈恩御作。云々」（昭法全、一三一頁）と記されている。

8、智憬については『往生要集』には「智憬」『阿弥陀経釈』には「智景」となっており、「憬」と「景」は異なる。智景については現点では不明であるが、智憬については、良忠の『往生要集義記』に「元曉師ノ大経ノ宗要ニ作レル釈師也。恒武天皇代人」（浄全、十五ノ二三六頁）とある。

9、小沢勇貫「法然上人の三部経観」新『浄土学』第七巻（旧二七輯）（大東出版、昭和五六年）二九一頁。香川孝雄氏も「阿弥陀経釈」の来意の文により、観前弥後説をとっている。（前掲論文、二二五頁）

多いため、別本として取り扱う、これは古本（善照寺本）『漢語灯録』に「私云此一巻与現行印本三経釈　別本也」とあることからでもある。

E、「三部経釈」拾遺古徳伝[26]所収。これは東大寺講説の講録とされている。

3、「逆修説法」

イ、専修寺本　高田専修寺所蔵「西方指南抄」所収、上本―康元二年（一二五七）、上末―康元元年（一二五六）親鸞書写、「法然上人御説法事[27]」

ロ、浄厳院本　安土浄厳院所蔵「無縁集[28]」

ハ、法然院本　法然院所蔵「師秀説草」貞享四年（一六八七）

ニ、通元院本　東京通元院所蔵「師秀説草」（法然院本に同じ）

ホ、浄厳院本　安土浄厳院所蔵　漢語灯録「逆修説法」永享二年（一四三〇）開版

ヘ、善照寺本　千葉善照寺所蔵　漢語灯録「逆修説法[29]」

ト、谷大本　大谷大学所蔵　古本漢語灯録所収「逆修説法」

チ、宝永本　宝永二年（一七〇五）開版　漢語灯録所収「逆修説法」

リ、正徳本　正徳五年（一七一五）義山開版　漢語灯録所収「逆修説法[30]」

イからトの七本とチリの二本とは別系統のものの如くである。[31]

4、「選択集」

イ、廬山寺本　京都廬山寺所蔵「選択本願念仏集[32]」鎌倉期古鈔本

ロ、當麻本　當麻寺奥之院所蔵「選択本願念仏集」元久元年（一二〇四）古鈔本[33]

ハ、延応本　延応元年（一二三九）開版　鹿ケ谷法然院所蔵

ニ、正中本　正中二年（一三二五）開版　京都大学久原文庫所蔵　但し下巻のみ現存

ホ、永享本　永享十一年（一四三九）開版　滋賀新知恩院所蔵

ヘ、恵空本　元禄七年（一六九四）恵空開版

ト、義山本　元禄九年（一六九六）義山開版[34]

チ、広本　竜谷大学所蔵　南北朝期書写　釈覚善　和文体

5、浄土宗略抄、「選択集」の中、引用文のみあげ、私釈は省略されている。この写本には次のものがある。

イ、善照寺本　千葉善照寺所蔵　漢語灯録巻十所収

ロ、谷大本　大谷大学所蔵　漢語灯録巻十所収

ハ、正徳本　正徳五年（一七一五）義山開版　漢語灯録巻十所収

まとめ

法然の三部経観はもとより往生浄土念仏の意味、根拠を明らかに

1、「三部経大意」と題する一群。これには次の六本があげられる。

イ、建長本　建長六年（一二五四）書写金沢文庫所蔵「三部経大意」[11]

ロ、正嘉本　正嘉二年（一二五八）親鸞書写、高田専修寺所蔵「三部経大意」[12]

ハ、慶信伝持本　高田専修寺所蔵　「三部経大意」[13]

ニ、元亨本　元亨元年（一三二一）円智開版、和語灯録「三部経釈」

ホ、寛永本　寛永二十年（一六四三）開版、竜大所蔵「三部経釈」（元亨本の再版）

ヘ、正徳本　正徳元年（一七一一）義山開版、和語灯録「三部経釈」[14]

ト、正徳本　正徳五年（一七一五）義山開版漢語灯録巻一「無量寿経釈」[19]

チ、享保本　享保十一年（一七二六）円悦開版「無量寿経釈」

2、東大寺講説本　これは三部経それぞれが講説の対象となっており、それぞれに写本が流布している。

A、「無量寿経釈」

イ、木注字版、刊年未詳[15]

ロ、寛永本　寛永九年（一六三二）開版「無量寿経釈」[16]

ハ、慶安本　慶安四年（一六五一）開版[17]

ニ、承応本　承応三年（一六五四）開版「無量寿経私記」

ホ、善照寺本　千葉善照寺所蔵　漢語灯録巻一所収「無量寿経釈」[18]

ヘ、谷大本　大谷大学所蔵　漢語灯録「無量寿経釈」

B、「観無量寿経釈」

イ、寛永本　寛永九年（一六三二）開版「観無量寿経釈」[20]

ロ、善照寺本　千葉善照寺所蔵　漢語灯録巻二所収「観無量寿経釈」[21]

ハ、承応本　承応三年（一六五四）開版「観無量寿経私記」

ニ、正徳本（一七一五）義山開版　漢語灯録巻一「観無量寿経釈」[22]

C、「阿弥陀経釈」

イ、善照寺本　千葉善照寺所蔵　漢語灯録巻三所収「阿弥陀経釈」[23]

ロ、谷大本　漢語灯録巻三所収「阿弥陀経釈」

ハ、正徳本　正徳五年（一七一五）義山開版　漢語灯録巻三所収「阿弥陀経釈」[24]

D、「阿弥陀経釈」

イ、寛永本　寛永九年（一六三二）開版「阿弥陀経釈」[25]

ロ、承応本　承応三年（一六五四）開版「阿弥陀経私記」

CとDは共に「阿弥陀経」の経釈書であるが、相違するところが

『阿弥陀経釈』の来意の文からは、あるいは『阿弥陀経』は『観経』以後に説かれたものとも考えられなくはない。小沢勇貫氏は『観経』『阿弥陀経』の前後について、『阿弥陀経釈』の来意の文から、法然上人は『阿弥陀経』を『観経』を紹述するものであり、『観経』の延長と見られたものとしている。(9)

また寛永版『阿弥陀経釈』には諸仏の證誠に関連して、次の如き問答がある。

問テ曰ク。若シ依リ本願ニ證ニ誠念仏ヲ者ハ、双巻観経等ニ説ク念仏ヲ之時、何ゾ不ニ證誠一乎。答、解ルニ有ニ二義一、一ニハ解メ云。双巻観経等ノ中ニ雖レ説クハ本願念仏ヲ、兼ヲ明ス余行ヲ故不ニ證誠一。此ノ経ニハ一向ニ純ラ説ニ念仏ヲ故ニ證ニ誠之ヲ。二ニハ解メ云ク彼ノ双巻等ノ中ニ雖レ無シト證誠之言一、此ノ経已ニ有ニ證誠一。例メ此ニ思フニ彼ヲ於ニ彼等ノ経ノ中ニ所説念仏亦タ応レ有ニ證誠之義一。文ハ雖レ在リト此経ニ、義ハ通スル於彼ノ経ニ。（昭法全、一五二頁）

ここでは『無量寿経』や『観経』で念仏を説くとき、どうして「證誠」がなかったのかと問い、それに対して二つの答えを出している。一つは『無量寿経』や『観経』では本願念仏を説いているが同時に、余行も説いている。だから「證誠」しなかったのである。しかるにこの『阿弥陀経』は一向に純ら念仏を説いているので證誠しているのである。第二の答えは、かの『無量寿経』などの中には「證誠」という言葉はなく『阿弥陀経』には「證誠」の言葉がある。それ故、この『阿弥陀経』の言葉から逆に『無量寿経』『観経』を考えてみると、これら二経の中にも證誠の義があるのである。

さてこの問答の中、とくに問いにおいて、「双巻観経等に念仏を説くの時、何ぞ證誠せざるや」といっている点について考えてみると、これは双巻観経では證誠が説かれていないが『阿弥陀経』にはこれが見える。換言すれば、『阿弥陀経』において始めて證誠という言葉がでて来ているのはなぜかという問いの如く解される。そうだとすれば『無量寿経』『観経』が『阿弥陀経』以前に説かれたものという理解が背景にあったとも考えられる。

これらの遺文からすれば、三経説時については寿前観後は明白だが、『阿弥陀経』については明言がない。しかし、先にあげた『阿弥陀経釈』の文からは『阿弥陀経』は『無量寿経』『観経』以後に説かれたものとも考えられうる。もっとも近代的な経典成立史の研究では『無量寿経』『阿弥陀経』『観経』の順とされている。(10) もちろんこうした近代的研究と法然のそれとは方法論的に異なるものである。法然の場合は「念仏」を基調とした上人独自の宗教的信仰の心眼で見た三部経の成立順位であって、それは客観的科学的方法とは異なるものであるところにむしろ一つの大きな特色があるといえる。

四、三部経末疏

法然が浄土三部経を注釈または解釈あるいは主要経典として引用解釈したものは多数見られるが、大きく五種類に分けられる。ここではそれぞれについての写本をあげるにとどめる。

すると次の如くになる。

	観経釈	選択集
(来意)	仏と衆生の修因感果	1、仏と衆生の修因感果
(文証)	1第七観の願成就文	2、観経の念仏衆生
	2中下品の四十八願	3、第七観の願成就文
	3大経の十劫成仏	中下品の四十八願
(理証)	4(寿経)仏の発心修行	
	依正二報	
	(観経)十三観	

『観経釈』で経の来意にあったものが『選択集』では寿前観後の理由の一つにあげてあり、『観経釈』の文証1・2は『選択集』の第3の理由に一括されている。『観経釈』での文証第3(十劫成仏説)及び理としての依正二報—十三観説は『無量寿経』が前に説かれたことを補強しているものと思われる。『観経釈』はその来意において示されている如く、『無量寿経』が前に説かれたものという前提でなされているものである。それ故に、寿前観後説を補強する意味で先の二説がさらに加えられていると了解することができよう。『観経釈』は『観経』全体についての釈である。これに対して『選択集』は本願念仏を中心とした主張である。それ故『観経釈』には寿前観後の理由として、とくにあげられなかった第九観の「念仏衆生」の文証があげてあると理解することができるのではないか。

なほ、『選択集』における寿前観後説について、盧山寺本の文をあげたのであるが、盧山寺本を含め、他の多くの写本にも次の文が見える。

問、若爾ハ者何ガ故ソ直ニ不レシテ説ク二本願念仏ノ行一ヲ煩ク説イヤ二非本願ノ定散諸善一ヲ乎。答、本願念仏ノ行ハ双巻経ノ中ニ委ク既ニ説レ之。故重テ不レル説耳ノミ。(昭法全、二四二頁)

ここに「双巻経の中に委しく既にこれを説く」とあるのは、『無量寿経』が『観経』以前に説かれたという考えを示すものである。

次に『阿弥陀経』の説時順位について見てみよう。これに関連しては『阿弥陀経釈』に経の来意を示す中で次の如く示している。ここでは『観経』との比較において語られている。

観経中ニ始ニハ広ク説二諸行一ヲ遍ク逗二機縁一後ハ廃ス二諸行一ヲ、只念仏一門ナリ、然ニ猶ヲ彼経諸行ノ文ハ広ク、念仏ノ文ハ狭シ。初心ノ学者易レ迷、是非難レ決。故今此経廃二諸行往生一ヲ、復次ニ明ニ但念仏往生一ヲ、於二念仏ノ行一ニ為ナリ生二決定ノ心一ヲ。

これによれば、『観経』は始め広く諸行を説き後には諸行を廃して念仏一行を説いた。しかし、諸行について広く、念仏についてはその文は少ない。それ故、初学者は迷い易い。だから、この『阿弥陀経』では諸行往生を廃して但念仏往生をあかして念仏行を勧めている。これは念仏において決定心を得させるためである。即ち『観経』との比較において、『阿弥陀経』は念仏一行を勧めるために説かれたものとして位置づけている。『阿弥陀経』の説時が『無量寿経』『観経』とどういう関係にあるかは、これだけでは明白ではない。

これによれば、『観経』には浄土の依正二報をあかしているが、このようなことは、先に『無量寿経』が説かれているからのことである。即ち阿弥陀仏が浄土を建立されて（願成就されて）いるから可能なことだというのである。これによっても、『無量寿経』が先で『観経』は後に説かれたといえる。

次に理の面からこれを見ると「寿経ノ中ニ説ク彼仏ノ発心修行、依正二報ヲ今経ニハ付テ彼ノ依正之説ニ云フ此ノ十三観ヲ。故ニ知ヌ、寿前観後也」。（昭法全、九八頁）というのである。即ち、理論的にいって、まず『無量寿経』には仏の発心修行とその結果の依正二報が説かれている。『観経』は、これをもとして、この依正二報について、十三観を説くのである。このことから『無量寿経』が先で、『観経』は後に説かれたものといえるのである。

この寿前観後説は、また盧山寺本『選択集』第十二章にも見える。（昭法全、三四二頁）これによれば『無量寿経』と『観経』の前後についての議論があったようであるが、結論的には寿前観後と法然は理解されていたようである。その理由として三つあげてある。第一は仏と行者の修因感果の理で、これは『無量寿経』には法蔵比丘の修因と無量寿の感果があかされている。それに対して『観経』には行者の定散二善の修因及び九品往生の感果があかされている。仏の修因感果、即ち仏国土成就がなければ、行者の修因感果の意味もない。即ち行者の修行は仏土が成就していて、それを目ざすから意味があるであって、仏の修因感果なくして行者の修因感果は意味がないこととなる。故に仏の修因感果を説く『無量寿経』が先に説かれ、『観経』は後に説かれたことになる。

第二は『観経』仏身観に説く念仏衆生の理である。『無量寿経』には念仏の行相を細かに説いているが『観経』では定散諸行は説くが念仏の行相は説いていない。もし『無量寿経』が前もって念仏を説かなかったら、どのようにして念仏の法のあることを知ることができるだろうか。しかし『無量寿経』では本願を首として念仏の法を説いているが、それには七つの文がある。①本願の文、②願成就の文、③上輩の中の一向専念の文、④中輩の中の一向専念の文、⑤下輩の中の乃至十念の文、⑥同輩の中の乃至一念の文、⑦流通の初めの一念無上の文である、もし念仏の法を前もって聞かなかったら、どうして『観経』仏身観において、直ちに念仏衆生と説けるのだろうか。このことを考えると、寿前観後といわざるを得ない。

第三には法蔵比丘の理である。『観経』第七観の終りに「これ本、法然比丘の願力所成」とあり、また中品下生には、「亦説法蔵比丘四十八願」とある。その前に法蔵比丘の四十八願が説かれていなかったら、どうして直ちにこのような「法蔵比丘四十八願」と『観経』に説かれるのであろうか。以上考えて来ると、やはり『無量寿経』が前に説かれ『観経』が後に説かれたと見るべきである。

右にあげた『選択集』第一の理と同趣のことは『観経釈』では経の来意を明かすところに記されている。そこには次の如くある。

彼ニハ〔寿経〕雖レ説クト仏ノ因果ヲ未ダ説カ行者ノ修因感果ヲ故ニ次ニ仏ノ修因感果ト行者ノ修因感果ト来タル。（昭法全、九八頁）

寿前観後説に関する『観経釈』と盧山寺本『選集』の主張を図示

『阿弥陀経釈』には三部経の典拠として、上記の六文があげてある。これらをさらに考察すると、この六文中、四文（『十疑論』、『浄土論』、智憬、『往生要集』）までが『往生要集』に見えるものである。このことは、法然の三部経選定に当って『往生要集』が重要な役割を果していたことを示すものといえよう。とくに智憬に関しては『往生要集』に迦才の『浄土論』からの十二経七論をあげた直後に「已上智憬師同レ之」と挿入されている。(8)（浄全十五ノ六五頁）『阿弥陀経釈』にはこのことが「智景疏文者、意同二釈才一」とある。これなどは『往生要集』のものを引用したものとさえ思われる。

『往生要集』には、ここにあげる『観経疏』の文は見えない。これはすでに法然が『観経疏』から直接習得されたものであろう。しかも三部経の経典名が明確に示されているのは六文中この『観経疏』のみである。他の五文には三部経の経典名が一組で示されてはいない。（三部経以外の経典もあげてある。）

このことから法然はまず『往生要集』により浄土教に関する経典を知り、さらに『観経疏』を味読されて自らの浄土教の根本としの三部経を選定されるに至ったと考えられる。

三、三部経説時の順位

浄土三部経はどのような順序で説かれたものであろうか。『観経釈』には次の如く示す。

寿経観経之前後、暗ニ以テ難レシ定メ。今依テ二一意一ニ、先寿経、後此経。

（昭法全、九七頁）

『無量寿経』と『観経』の前後を定めることは難しいが、一つの考えによれば、『無量寿経』が先で『観経』が後に説かれたのである。その理由は文と理の両面から見ることができる。

まず文について、三文をあげている。第一は『観経』華座観の文でそこには「法蔵比丘の願力所成」とある。これによれば、『無量寿経』に阿弥陀仏の願が先に説かれているので『観経』では「願力所成」といったのである。第二は中品（輩）下生の文「阿難白仏法蔵比丘四十八大願」（＝亦説法蔵比丘四十八願）という文。第三は『無量寿経』の上品に、「仏告阿難、法蔵菩薩今已成仏現在西方、去此十万億刹、其仏世界名曰安楽」とある文である。この三文は前二文が『観経』からの文で、阿弥陀仏の「願成就」とか「四十八願」があげてあり、これらは『観経』以前に『無量寿経』においてすでに阿弥陀仏の四十八願成就が説かれているので、この『観経』における発言が有効になっていることを示すものである。後の一文は『無量寿経』からのものであるが、これが願成就して今現に西方安楽国に阿弥陀仏が在しますことを示すものである。これらの三文は『無量寿経』が先に説かれ『観経』が後に説かれたことを示している。

なほ正徳版『観経釈』には、第三の文の後に、続いて次の如く示している。

今経（＝観経）具ニ説二彼ノ土ノ依正一ニ報一ヲ、今経若シ先ナラバ彼ノ経（無量寿経）何ゾ有二此ノ語一。故ニ知ヌ寿経是レ先ナルコトヲ也。

（同、九八頁）

（浄全六ノ五七二―七三頁）

但し『阿弥陀経釈』では「問曰」から「決定得生」まではあって後は「云云」として、「又阿弥陀経」以下の文はあげていない。しかし厳密にはこの文をあげなければ「三経」にはならない。また『阿弥陀経釈』ではこの条の終りに「今依二此文一学者行者、可レ学二三経一論一」（昭法全、一三〇頁）と示している。ここには「三経一論」の言葉が見える。これは『選択集』第一章に示される法然上人の基本的な経典観である。しかし、引文からこの「三経一論」を導き出すのは少し無理があるように思える。それはここには三経一論としてのまとまった経典が示されているものでもなく、それ以外の経論があげてあるからである。故にこの「三経一論」なる言葉の背後には、この『阿弥陀釈』が作られる以前「三経一論」という考えが上人の上にあったのではないかと思われる（或はこの「三経一論」なる言葉は後人の付加かもしれない。）なほこの『浄土十疑論』は天台智顗の作ではないとされている。(6)

3、慈恩の『西方要決釈疑通規』に説く四修の第二恭敬修の第二に次の如く示す。

二敬二有縁像教一謂造二西方弥陀像変一不レ能二広作一但作二一仏二菩薩一亦得教者弥陀経等五色袋盛自読教レ他此之経像安二置室中一六時礼懺華香供養特生二尊重一。（浄全六ノ六〇四頁）

この文中の「弥陀経等」について『阿弥陀経釈』には、

専可三読二誦阿弥陀経等一ヲ。此ノ中ニ等者、意指二寿観経一ヲ。（昭法全、一三〇頁）

として示してある。即ち「弥陀経等」とある中に阿弥陀経、無量寿経、観無量寿経の三経が含まれているというのである。なほ、この『西方要決』も今日では慈恩の作ではないとされている。(7)

4、迦才の『浄土論』には次の如く示されている。

経引二十二部一一無量寿経二観経三小弥陀経四鼓音声王経五称揚諸仏功徳経六発覚浄心経七大集経八十方往生経九薬師経十般舟経十一大阿弥陀経十二無量清浄覚経○論引二七部一一往生論二起信論三十住毗婆沙論四一切経中弥陀偈五宝性論六龍樹十二礼七攝大乗論也。（浄全六ノ六四五頁）

ここには十二経七論があげてあるが、この中に、『無量寿経』『観経』『阿弥陀経』『往生論』の名が見える。

5、智景の疏は現存しないので詳細は不明であるが、『阿弥陀経釈』には「意同二迦才一」とある。

6、恵心の『往生要集』には前にあげた天台の『浄土十疑論』及び迦才の『浄土論』の文をあげて往生極楽の証拠とし、さらに次の如く示している。

私ニ加テ云法華経ノ薬王品四十華厳ノ普賢願目蓮所問経三千仏名経無字宝篋経千手陀羅尼経十一面経不空羂索如意輪随求尊勝無垢浄光光明阿弥陀等諸顕蜜教ノ中ニ専勧ル二「極楽一ヲ不レ可カヲ二称計一フ。（浄全十五ノ六五頁）

この中『法華経』『華厳経』は『逆修説法』（初七日）『選択集』などにも見える。また随求尊勝は『選択集』に傍依浄土経典としてあげられている。

て四部といったということ。

①の場合の「ある人師」とは誰か。大谷旭雄氏によれば、宋代の天台宗の学者で、『観無量寿経顕要記』を著した源清であろうとする。[1] また、大橋俊雄氏はこれは智顗とされ、それは『浄土十疑論』であるとされる。[2] しかし『十疑論』には『逆修説法』所載の文は見えない。

②の場合、「三部経」の名称について、大谷旭雄氏は、東大寺講説時には「三部経」とのみ称し『逆修説法』に到って「浄土三部経」「弥陀三部経」と呼ばれるようになったという。これに対して、香川孝雄氏は、

『阿弥陀経釈』の末尾に「浄土三部妙典」とあり、また法然上人の立教開宗後、まもない頃の撰述とされる『三部経大意』の巻頭にも「浄土ノ三部経」という言葉があるのをいかに解釈するか、なほ問題を残している。[3]

と指摘されている。

③の場合の「ある師」とは、大谷旭雄氏は慈恩作と伝えられる『阿弥陀経疏』にこの説（四部経説）があるから慈恩大師のことだろうとしているが、これに対して、香川孝雄氏は『阿弥陀経疏』の作者が慈恩であることには疑問があるから、これはおそらく、宋代の一浄土教信奉者と見るのが当を得ているようだとしている。[4]

ここで香川氏が「宋代の一浄土教信奉者」とされたのは、慈恩がこの時代の人であるからであろうか、その根拠は必ずしも明白でない。この『阿弥陀経疏』の後批とは、「大中七年（八五三）に福州開元寺常契が入唐智証大師円珍に授けた」とある[5]ことからすれば、これは宋代（九六〇～）ではなく、唐代（またはそれ以前）の一浄土教者の作と考えることができる。

二、三部経選定の典拠

浄土三部経を選定した典拠として、「阿弥陀経釈」には六文をあげている。（昭法全、一三〇頁）

1、善導の『観無量寿経疏』（『観経疏』）には、その散善義の中に「一心専念読誦此観経阿弥陀経無量寿経等」（浄全二ノ五八頁）とある。ここに無量寿経、観経、阿弥陀経の名が示されている。

2、天台の『浄土十疑論』第四疑には次の如くある、

問等是念求レ生二一仏浄土一何不下十方仏土中随念二一仏浄土一随得中往生上何須三偏念二弥陀仏一耶。答凡夫無レ智不二敢自専一専用二仏語一故能偏念二阿弥陀仏一云何用二仏語一釈迦大師一代説法處處聖教唯勧下衆生専レ心偏念二阿弥陀仏一求上レ生二西方極楽世界一如二無量寿経観経往生論等数十余部経論文等一殷勤指授勧レ生二西方一故偏念也、又阿弥陀仏別有二大悲四十八願一接二引衆生一又観経云阿弥陀仏有二八万四千相一一一相有二八万四千好一一一好放二八万四千光明一徧照二法界念仏衆生一攝取不レ捨若有レ念者機感相應決定得レ生又阿弥陀経大無量寿経鼓音王陀羅尼経等云釈迦仏説レ経時皆有二十方恒沙諸仏一舒二其舌相一徧覆二三千大千世界一證成一切衆生念二阿弥陀仏一乗二仏大悲本願力一。

法然上人の三部経観

服部正穏

序

法然上人は浄土教の根本経典として、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の三部を選ばれた。ここではこの三部経にかかわる次の点を明らかにしたい。三部経の名称、三部経選定の典拠、三部経の説時、三部経の末疏。

一、三部経の名称

「三部経」という名称について、従来でもすでに各宗の根本経典にそのような名称がつけられていた。『選択集』第一章には、

三部ノ名其ノ例非レ一ニ。一ニハ者法華ノ三部。謂ク無量義経、法華経、普賢観経是也。二者大日ノ三部、謂ク大日経、金剛頂経、蘇悉地経是也。三ニハ者鎮護国家ノ三部、謂ク法華経、仁王経、金光明経也。四ニハ弥勒ノ三部、謂ク上生経、下生経、成仏経是也。

（昭法全、三一二頁。逆修説法、同二三五頁）

と示され、ここには法華の三部経、大日の三部経、鎮護国家の三部経、弥勒の三部経があげられている。そして、浄土の三部経として、『無量寿経』『観経』『阿弥陀経』があげられている。

また浄土の三部経について、古本『逆修説法』初七日には次の如く示されている。

今此ノ弥陀ノ三部経モ有ル人師云。浄土教ニ有リ三部一、所謂双巻無量寿経観無量寿経阿弥陀経等是也。依レ之ニ今名ケル浄土ノ三部経ト也。又名ク弥陀ノ三部経一。又或師ノ云。彼三部経ニ加テ皷音声経ヲ名ク四部一。

（昭法全、二三五―三六頁）

ここには三つの事が指摘される。①ある人師が浄土教に三部ありといったということ。②三部経の名前について、浄土の三部経、または弥陀の三部経ということ。③ある師が三部経に皷音声経を加え